

中国語会話における話題転換判断の手がかりの実験的研究 An Experimental Study on the Cues for Topic Change Recognition in Mandarin Conversation

趙 鵬群, 巽 智子
Pengqun Zhao, Tomoko Tatsumi
神戸大学
Kobe University
206c301c@stu.kobe-u.ac.jp

概要

本研究では、中国語会話における話題転換の判断に使われる手がかりを心理言語学的な実験により検証した。その結果、先行研究で話題転換部の「手がかり」とされる要因の中には、談話標識、質問表現、情報提供、笑い、沈黙の5つの要因が中国語のリアルタイムの話題転換の判断に正の影響を与えることがわかった。また、話題転換部の「手がかり」が多いほど話題転換が判断されやすくなること、そして異なる談話標識が話題転換の判断に様々な影響を与えることが示された。

キーワード：会話、話題転換、知覚、中国語

傾向や機能なども議論されてきた（田中 2015；2018）。しかし、これらの先行研究は会話分析という質的なアプローチによるものであり、極めて多種多様な手がかりが会話参加者にどのように作用するかの実証的な研究が不足している。大場・中井（2020）では、会話分析の授業を受けた学生計40人を対象に、話題区分調査を行い、会話分析の初学者の話題区分の認定基準を探った。しかし、会話の映像を見ながら文字化資料に話題転換を区分するタスクであったため、実際の会話中に参加者が認識する話題転換にアプローチできない。

1. はじめに

日常会話において、われわれは様々な話題を次々と導入しながら、会話を繋げていく。話題転換の仕組みについて、談話標識の使用や笑い、姿勢の変化などの話題転換部の言語的・非言語的な手がかりの存在が指摘されてきた（村上・熊取谷 1995；木暮 2002 等）。しかし、これらの研究は、研究者による会話データのテキスト分析や映像分析である。会話の参加者による、会話中のリアルタイムの話題転換の認識についての実証研究が不足している。

本研究では、中国語母語話者を対象にリアルタイムの話題区分の実験を行い、話題区分判断に影響する要因を定量的に明らかにする。

2. 先行研究と研究課題

話題の転換部に現れる言語的・非言語的要素に関する研究によると、話題の転換部には談話標識、メタ言語表現、繰り返し、質問表現、情報提供、笑い、あいづち、評価的発話・まとめ、沈黙などの要素が現れやすい。（e.g. 水川, 1993; メイナード, 1993; 村上・熊取谷, 1995; 中井, 2003; 楊 2005; Holt, 2010）。また、話題転換時における各談話標識の使用

実際の会話中に参加者が認識する話題転換を研究するには、心理言語学的実験アプローチが有効である。その一例として、De Ruiter ら（2006）の研究が挙げられる。De Ruiter ら（2006）は先行研究でターン終了部の予測「手がかり」とされる要因を検証するために、オランダ語の母語話者60名を対象に、リアルタイムでのターン終了の予測実験をした。その結果、語彙統語論的情報の要因がターン終了の予測に大きな影響を与えるが、イントネーション（pitch contour）の要因はターン終了部の予測に影響を与えないことが明らかになった。このように、心理言語学的アプローチは人間がどのようにコミュニケーションの過程を理解するかを検証するのに有効である。

以上のことをふまえ、本研究では、以下の検証仮説を設ける。

仮説 1: リアルタイムの話題転換の判断は先行研究で「手がかり」とされる要因によって説明される。

仮説 2: 異なる談話標識が話題転換の判断に与える影響は異なる。

3. 研究方法

本研究では、リアルタイムの話題区分判断に影響

する要因を明らかにするという目的のために、会話データ分析を学んだことのない20～30代の大学生・大学院生である中国語母語話者20名を調査対象者とした。調査材料に関して、初対面会話より友人間の日常会話においての話題転換のパターンが豊富であるため、本研究では自然会話コーパス TalkBank (MacWhinney & Wagner, 2010) より、中国語母語話者の友人同士による電話会話をそれぞれ5つ、約30分のセグメントを抽出し、調査材料とした。調査材料は男女/男性同士/女性同士の会話が含まれている。また、聞き取りやすい、いくつかの話題が含まれていることを基準に選定した。

5つのセグメントはランダムに順序に呈示した。1分30秒の事前準備の練習のあと、参加者は会話の音声データをPC上で聴きながら、話題転換を判断した瞬間にPCのキーを押して回答した。その際参加者には、自分がその会話に参加していることを想定して、聴きながらできるだけ即時に話題の変化を判断するように指示された。集中力を落ちないように、約10分ごとに1分間の休憩を挟んだ。音声の再生と回答にはソフトウェア Adobe Audition を用いた。

データのコーディングに関して、まず、調査材料の5つのセグメントの文字化資料を使用し、ターンごとに発話の開始時間と終了時間をコーディングした。次に、参加者の回答時間を利用し、各参加者がどのターンで回答したかをコーディングした。また、話題転換部の手がかりとして指摘される9種類の要因（談話標識、メタ言語表現、繰り返し、質問表現、情報提供、笑い、あいづち、評価・まとめ、沈黙）の有無及びその種類をターンごとにコーディングした。具体的な手がかりの分類及びその定義は表1に示す。さらに、回答したターンの3つ前までのターンに含まれている手がかりの数もコーディングした。

話題区分判断と話題転換部の手がかりとして指摘される9種類の要因の関係について、R (R Core Team, 2023) を用いて統計分析を行った。

表1 本研究に用いた話題転換部の「手がかり」とされる要因の分類

(楊 2005 ; 34) を参照に一部変更)

談話標識	「但是」(でも), 「那」(では), 「欸」(えっ) 等文頭に用いられて話す内容の展開に寄与する表現.
------	---

呼びかけ表現	相手の名前を呼びかけとして用いる場合.
メタ言語表現	「我告诉你」(教えてあげる) 等話題として取り上げられることを示す表現.
あいづち	「对」(はい), 「哦」「奥」(おお), 「嗯」(うん), 「是嘛」(そうですか) のような会話中に挿入される短い表現, 応答として使われるものは除く.
繰り返し	自分または相手の発話の一部または全部をくり返す発話, ただし相手に確認を要求するものは除く.
評価・まとめ	話題の内容(自分の話と相手の話両方を含む)を含め, まとめる, あるいは評価する発話.
質問表現	「怎么样」(どう)「多少」(どのぐらい)「谁」(誰) 等質問表現が使われる場合.
情報提供	5つ前のターンまでの発話に含まれてない新しい意味的なカテゴリーの単語が提供される場合.
笑い	明確な呼気を伴う笑いで, 微笑みは含まない.
沈黙	発言権を取ろうとする人がいなく, 1秒以上の沈黙がある場合.

4. 結果

各参加者間の話題転換の区分数の平均は55.30, 標準偏差は22.732であった。5つのセグメント(S1, S2, S3, S4, S5)ごとの話題転換の区分数の平均と標準偏差を表2に示す。

また、約30分の会話データにおける話題転換部の各「手がかり」の数の集計結果を表3に示す。沈黙が一番少なく(8回), 繰り返し発話が一番多く(477回)確認された。

表2 5つのセグメントごとの話題転換の区分数の平均と標準偏差

	S1	S2	S3	S4	S5
M	14.05	8.25	10.40	13.65	8.95
SD	4.25	4.62	5.54	5.82	4.07

表3 実験に用いた会話における話題転換部の「手がかり」の数の集計

種類	沈黙	笑い	談話標識	繰り返し	メタ言語表現	あいづち	質問表現	評価・まとめ	情報提供
数	8	32	218	477	47	170	50	30	196

4.1 話題転換の判断と話題転換部の手がかりの関係

話題転換の判断に話題転換部の「手がかり」が及ぼす影響を明らかにするために、一般化線形混合モデル (GLMM, lme4 package) による解析を行った。各ターンでの話題転換の回答の有無を応答変数、各ターンでの「手がかり」の有無を説明変数とした。また、回答者と発話をランダム要因として考慮した。表4に示したとおり、解析結果によれば、9つの「手がかり」のうち、談話標識、質問表現、情報提供、笑い、沈黙の5つが話題転換の判断に有意な正の影響を及ぼしていることが明らかとなった。つまり、これらの「手がかり」が使われると、話題転換の判断が行われる可能性が高まると言える。一方で、あいづちは有意な負の影響を示した。あいづちは、「聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」堀口 (1997; 42) であり、「話を続けてほしい」、または「情報の追加・訂正・要求」(メイナード 1993; 160) などといった様々な機能を持つため、あいづちが使われる場合、話題転換の判断が行われる可能性が低下することが考えられる。また、メタ言語表現、繰り返し、評価的発話・まとめの3つの要因は、話題転換の判断には効果があるとは示されなかった。

表4 一般化線形混合モデルで求めた話題転換の判断に及ぼす「手がかり」の効果

Fixed effects:	Estimate	Std. Error	z value	Pr(> z)	
Intercept	-4.350	0.376	-11.563	< 2e-16	***
沈黙	1.249	0.321	3.895	9.82e-05	***
笑い	0.785	0.187	4.209	2.57e-05	***
談話標識	0.368	0.168	2.192	0.028	*
繰り返し	-0.114	0.314	-0.365	0.715	
メタ言語表現	0.055	0.180	0.306	0.759	
あいづち	-0.294	0.149	-1.971	0.049	*
質問表現	0.959	0.157	6.092	1.11e-09	***
評価・まとめ	0.005	0.195	0.028	0.978	
情報提供	0.541	0.165	3.283	0.001	**

同様に、話題転換部の「手がかり」の数が話題転換の判断に及ぼす影響についても同様に一般化線形混合モデルによる解析を行った。

表5 一般化線形混合モデルで求めた話題転換の判断に及ぼす「手がかり」の数の効果

Fixed effects:	Estimate	Std. Error	z value	Pr(> z)	
Intercept	-5.246	0.257	-20.387	< 2e-16	***
cues 数	0.434	0.055	7.859	3.87e-15	***

表5に示したとおり、話題転換部の「手がかり」の数は、話題転換の判断に統計学的に有意な影響を及ぼすことが明らかとなった (Estimate= 0.434, SE=0.055 z=7.859. p=3.87e-15).

4.2 異なる談話標識と話題転換判断の関係

また、話題転換時における中国語の談話標識には「那」、「但是」、「所以」などいろいろなものが見られる (田中 2015)。異なる談話標識が話題転換判断の確率に与える影響を明らかにするために、談話標識ごとの話題転換判断の割合 (各談話標識が生起する全発話のうち、話題転換判断がされた発話の割合) を算出した。その結果を図1に示す。

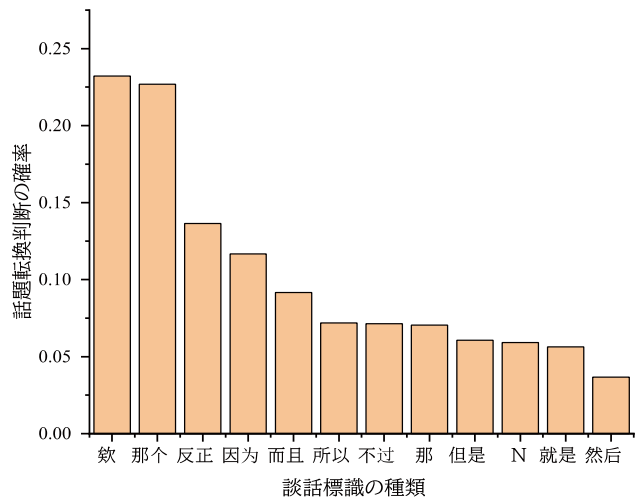


図1 異なる談話標識と話題転換判断の確率

図1から、異なる談話標識によって、話題転換判断の確率に大きな違いがあることがわかる。具体的には、「欸」(えっ)、「那个」(それその)という2つの談話標識が使われていた場合、話題転換判断の確率が25%以上で顕著に高い。また、「反正」(どのみち)、「因为」(なぜなら)という2つの談話標識につ

いて、話題転換判断の確率が10%以上と比較的高い。

それに対して、談話標識が無い場合(N)、話題の転換が判断された割合はわずか5.9%であった。「就是」(つまり)と「然后」(それから)の話題転換判断の確率が談話標識が無い場合(N)よりも低いため、これらの談話標識が話題転換判断にあまり影響を及ぼさないであろうことが示唆される。各談話標識が使われる場合とNの場合の話題転換判断の確率についてカイ二乗検定を行った結果、以下の傾向が明らかになった。「欸」「那个」「反正」「因为」が使われる場合はNよりも有意に話題転換の判断が多い($p < 0.05$)、「然后」が使われる場合はNよりも有意に話題転換の判断が低い($\chi^2(1) = 4.918, p = 0.027$)ことが確認された。ほかの談話標識とNの間には有意な差は認められなかった。

5. 考察

本研究では、リアルタイムの話題転換の判断に影響を与える「手がかり」の役割を心理言語学的実験アプローチで検証した。

本研究の研究結果によると、先行研究で話題転換部の「手がかり」とされる要因の一部のみが中国語のリアルタイムの話題転換の判断に影響を与えることが明らかになった。また、話題転換部の「手がかり」の数が多く、話題転換が判断されやすくなることが示された。

さらに、談話標識が話題転換の判断に影響を及ぼす度合いは、その談話標識の種類に大きく依存することが示唆された。話題転換に関わる談話標識のうち、「欸」(えっ)と「那个」(それ/その)は話し手が情報の検索に時間がかかったことを示す表現であり(山田2012; 楊2019)、これらの表現が使用される場合、新しい情報が導入される可能性が高いと思われるため、特に話題転換の判断の手がかりとして効果が強いのではないかと考えられる。この知見は、会話分析の文脈において、談話標識の具体的な種類が会話の流れ、特に話題の転換にどのように影響を及ぼすのかを理解するための新たな視点を提供した。

全体として、本研究はこれまでにない手法として、リアルタイムのデータを用いて話題転換の分析を行ったことで、話題転換のプロセスを理解するための新たな知見を提供したと考える。

しかし、コーディングの過程で特定の要素の定義や

区別が難しいという問題が挙げられる。例えば、「まとめや評価」の内容は、発話者の主観的な視点に強く依存するため、コーディングにおける判断が主観的になりやすい。この曖昧さは、結果の解釈に影響を及ぼす可能性がある。その点は今後の課題として取り組んでいくべきだと考える。また、本研究は中国語母語話者だけを対象にして、考察を行った。話題転換部の「手がかり」には文化差が存在するかどうかを検証するために、今後は、さらに日本語母語話者を対象にして、同様の調査を行い、両者の比較を行いたい。

文献

- [1] 大場美和子・中井陽子, (2020) 会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析, *社会言語科学*, Vol.22, No. 2, pp.62-77.
- [2] 木暮律子, (2002) 日本語母語話者と日本語学習者の話題転換表現の使用について, *第二言語としての日本語の習得研究*, Vol.5, pp.5-23.
- [3] 堀口純子, (1997) *日本語教育と会話分析*, くろしお出版.
- [4] 田中奈緒美, (2015) 話題転換時における談話標識の使用に関する日中比較, *島根大学外国語教育センタージャーナル*, Vol.10, pp.131-141.
- [5] 田中奈緒美, (2018) 談話理解の視点から見た話題開始のための談話標識の分類, *日本語教育*, Vol.170, pp. 130-137.
- [6] 中井陽子, (2003) 初対面日本語会話の話題開始部/終了部において用いられる言語的要素, *早稲田大学日本語研究教育センター紀要*, Vol.16, pp.71-95.
- [7] 水川喜文, (1993) 自然言語におけるトピック転換と笑い, *ソシオロゴス*, Vol.17, pp.79-91.
- [8] メイナード泉子, K., (1993) *会話分析*, くろしお出版.
- [9] 山田眞一, (2012) 中国語による教室談話における「つなぎことば」の機能—「語文」の授業を例に—, *富山大学芸術文化学部紀要*, Vol.6, pp.110-122.
- [10] 楊虹, (2005) 中日接触場面の話題転換—中国語母語話者に注目して—, *言語文化と日本語教育*, Vol.30, pp. 31-40.
- [11] 楊洲, (2019) 対話場面における中国語フィラー「那个」と「这个」の使用実態と機能, *人文研究 = Studies in humanities*, Vol. 198, pp.103-129.
- [12] Adobe Systems Incorporated, (2023). “Adobe Audition (23.0)” [Computer software], Adobe Systems Incorporated.
- [13] Bates D, Mächler M, Bolker B, Walker S, (2015) “Fitting Linear Mixed-Effects Models Using lme4”, *Journal of Statistical Software*, Vol.67, No. 1, pp.1-48.
- [14] Holt, E., (2010) “The last laugh: Shared laughter and topic termination”, *Journal of Pragmatics*, Vol.42, No. 6, pp. 1513-1525.
- [15] Linguistic Data Consortium, (2022) “CABank Mandarin CallFriend Mainland Corpus”, doi: 10.21415/T5R38Z.
- [16] De Ruiter, J.P., Mitterer, H. & Enfield, N.J., (2006) “Projecting the end of a speaker's turn: a cognitive cornerstone of conversation”, *Language*, Vol.82, No. 3, pp. 515-535.
- [17] MacWhinney, B., & Wagner, J., (2010) “Transcribing, searching and data sharing: The CLAN software and the TalkBank data repository”, *Gesprächsforschung*, Vol.11, pp. 154-173.
- [18] R Core Team, (2023) “R: A language and environment for statistical computing”, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL <https://www.R-project.org/>.